

令和7（2025）年度

熊本大学法学部

後期日程入学試験問題

小論文（その1）

試験時間 120分

ページ・・・1～5

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この小冊子は開かないこと。
- 2 試験開始後、問題用紙、解答用紙、下書用紙が揃っているかを確認すること。
- 3 解答用紙すべてに受験番号を記入し、氏名は記入しないこと。
- 4 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。
- 5 配布された解答用紙は持ち出さないこと。
- 6 試験終了後、問題用紙および下書用紙は持ち帰ること。

【問題】

次頁からの文章は昭和四年（一九二九年）に書かれたものである。これを読んで〔問一〕〔問二〕に答えなさい。

〔問一〕

著者の主張を四〇〇字以内で要約しなさい。

〔問二〕

著者の主張を参考にして、現代の日本における「公共的な問題」に対する関心のあり方について、具体例を挙げて、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

【出典】

和辻哲郎『風土』（岩波書店、一九七九年）一九三〜二〇二頁。なお、一部の漢字については注を付している。

なぜこのように自動車や電車に対しても道路に対してもまた都会そのものに対してでも不釣り合いな家が、——実に珍奇なほどに小さな家が、——依然として地に食いついた姿を都市のまん中に示すのであるか。人はそれを経済的な理由に帰するであろう。日本はまだヨーロッパほどには富んでいない、だから高層建築が起らない、と言うであろう。しかし日本の都会がそのだっ広さのために浪費している金高を考えれば、右の理由は容易に首肯し難い。地に食いついた小さな家の建築費を数十戸合算し、それに敷地の費用を考慮に入れ、さらに右にあげたとき種々な浪費を計上するならば、堂々たる鉄筋コンクリートの高層建築といずれが安価であるかは容易に言い難い。これらの高層建築が建てられないのは、経済的の力がないからではなく、ただ共同的に、また公共的に都市が営まれないからにほかならぬのである。ではなぜ人は共同的に公共的に都市を営もうとしないのであろうか。その方が便利であり、その方が快適であり、そうしてまたそれが初めて都市の意義を発揮するものである方法を、どうして選ばうとしないのであろうか。それを選ばない理由が、日本の「家」にあらわれている、と自分は考える。そこで家というものの有り方がここで問題になる。

ヨーロッパの都市の家は、豪富の人をのぞいて、個人が一つの「建物」を占居するのではない。建物をはいると左右に一戸ずつの「家」がある。階段をのぼればそこにも左右に一戸ずつの家がある。五階ならば十戸、六階ならば十二戸が廊下に面して存している。さらに入り口から中庭へ抜けて他の入り口に行けば、そこにも階段を持った同じ意味の廊下が同じ建物の中を上へのびている。この廊下はいわば道路の延長である。否、本来の意味における往来である。そこでこの往来を通ってどれかの「家」の戸口をはいるとする。そこに「家」の中の廊下がある。室々の戸口がこの廊下に向かって開いている。が、その室の戸口は鍵で密閉し得るものであり、室相互間の通路もまた密閉し得るようになってきている。従ってわずかに一挙手によっておのおのの室が独立した一つの「家」となり得る。その家庭に属しない人がその家庭に何の煩いも与えずに、この室を一つの「家」として住み得る。この点からは家の中の廊下もまた往来の資格を得ることができ。借り聞している人のもとへ書留郵便を届けようとする配達夫が建物の中の廊下の往来を通り、家の中の廊下を通過して、その人の室までやってくるのは、この往来の意味をあらわに示したものである。配達夫のみならず書店の小僧でも運送屋の人も夫でも百貨店の小使いでも皆そうする。日本の家の「玄関」に当たるものがここでは個人の室の中にある。そうなる往来は個人の室の前まで来ていることになる。個人が直接に往来に、従って町に接触するのである。

が、また逆に考えることもできる。個人はおのが室に、あるいはおのが「家」にいまのまま通常の姿で廊下へ出る。そこでちょっと帽子を頭へかけて（あるいはこれを省いてもよい）も一つの外の廊下へ出る。それから階段をおりて建物の入り口からさらにもう一つ外の——廊下へ——そのままの姿で出る。なぜならそこにあるアスファルト敷きの通路は朝水で洗ったものであり、建物の中の廊下よりも汚いわけではないからである。（建物の中の廊下でも時にはこのアスファルト敷きの通路より汚いことがある。）ただそれが屋内の廊下と異なるのは上に空が見え冬には暖房の設備がないことだけに過ぎぬ。人はこの廊下を通過して飲食店へ行って食事する。あるいはカフェーへ行って一杯のコーヒーを前にして音楽をききカルタを弄ぶ。それは大きい家の中で、長い廊下を伝って食堂へ行きあるいは客間へ行く何の異なることもない。それは単に一つの室を家とする独身者に限ったことではなく、一つの家族としても日常に行なうところである。彼らはちょうど日本の家族が茶の間に集まってむだ話をしたりラヂオを聞いたりすると同じ意味で、カフェーへ行って音楽をききカルタを遊ぶ。カフェーは茶の間であり、往来は廊下である。この点から言えば町全体が一つの「家」になる。鍵をもって個人が社会からおのれを距てる一つの関門を出れば、そこには共同の食堂、共同の茶の間、共同の書斎、共同の庭がある。

しからば廊下は往来であり、往来は廊下である。両者を判然と区切る関門はどこにもない。ということとは、「家」の意味が一方では個人の私室にまで縮小され、他方では町全体に押しひろげられるということにほかならぬ。それはつまり「家」の意味が消失したということである。家がなくなつてただ個人と社会とがあるということである。

日本には明らかに「家」がある。廊下は全然往来となることなく、また往来は全然廊下となることがない。その関門としての玄関あるいは入り口は、そこで截然と廊下・往来の別、内と外の

別を立てている。我々は玄關をはいる時には「脱ぐ」ことを要し、玄關を出るときには「はく」ことを要する。配達夫も小僧もこの関門を入ることはできない。カフエーも飲食店もすべて「よその家」であって、決して食堂や茶の間の意味を持たされない。食堂や茶の間はあくまでも私人的であって共同の性格を帯びることがない。

日本人はこのような「家」に住むことを欲し、そこでのみくつろぎ得る。たといどれほど小さくとも、このような「家」としての資格を有するものを住居として求める。それほどの執着を起させる魅力はどこにあるのであろうか。「家」は截然と外なる町に対しておのれを区別しているが、しかしその内部においては室の独立というごときことの全然ないものである。室をへだてるのは、襖障子であるが、それらは鍵をかけるというごとき防衛的・対抗的な「へだて」の意志の表現としての性格をかたつて帯びたこともないし、またその可能性も持たない。それを明けようとする人に対してはそれを拒み得る何の力もそこに与えられておらぬ。しかもそれが有意義の「へだて」として役立つのは、それが閉ざされているということによって表示されている「へだて」の意志が、他の人によって常に尊重されるという相互の信頼にもとづくのである。すなわち「家」の中にあつては人々はおのれを護って他に対するといい必要を感じない。それは言い換えればおのれと他との間に「へだて」がないことである。鍵は他の意志に対して「へだて」の意志を表現するが、襖障子はむしろ「へだてなき」意志を表現しつつ、その「へだてなき」の上においてただ室を仕切るものに外ならぬ。いわばそれは一つの西洋間の中に置かれた衝立の意味しか持たない。鍵をもって護るといふような意味の個人は、「家」の中では解消する。かかる「へだてなき」を内に包みつつ、外の世界に対しては鍵のあらゆる変形(その内には高い板塀や恐ろしいな逆茂木などもある)をもって対抗するのが日本の「家」である。もしそこに魅力があるとすれば、それはこの小さい世界の内部における「へだてなき」にほかならぬであらう。

が、人は問うかも知れない、このような小さい世界は西洋風の長屋においても保存し得るではないかと。しかしこの西洋風の長屋は、それを作る時に共同的な協力を必要とするのみならず、その存立が住人の共同の態度を予想するものである。たとい廊下を距てた隣と互いに交際しないような状態においても、それはなお一つの組織であつて、暖房の設備、湯の設備、昇降器の使用、等々において常に共同的事であることは免れない。そうしてこの共同的事であることがちょうど日本人を最も不安ならしめるものなのである。それは総じて日本における最も強い「へだて」が、家と外なる世界との間に存することによって顕わにされている。ヨーロッパにおいては最も強い「へだて」は過去にあつては町を取り巻く城壁であり現在にあつては国境であるが、日本にはそのいずれもが存しない。桃山時代の前後に諸地方の城下町は初めて壕と土手をもって取り囲まれたが、しかしそれは武士の一群が他の攻撃を予想して作った防衛工事であつて、この町が他に対して己れを護り距てる意志を表わしたのではない。ヨーロッパの町の城壁に当たるものは、日本においてはまさしく家のまわりの垣根であり塀であり戸閉まりである。従つてヨーロッパ人が城壁の内部の世界において永い間訓練されたと同じことを、日本人は垣根の内部の小さい世界において訓練されたのである。城壁の内部においては、人々は共同の敵に対して団結し、共同の力をもつておのれが生命を護った。共同を危うくすることは隣人のみならずおのれが生存をも危うくすることであつた。そこで共同が生活の基調としてそのあらゆる生活の仕方の規定した。義務の意識はあらゆる道徳的意識の最も前面に立つものとなつた。とともに、個人を埋没しようとするこの共同が強く個人性を覚醒させ、個人の権利はその義務の半面として同じく意識の前面に立つに至つた。だから「城壁」と「鍵」とは、この生活様式の特徴である。しかるに垣根の内部の小さい世界においてはその共同は生命を危うくするというごとき敵に対するものでなかつたとともに、また容易に献身的な態度を引き出し得るごとき自然的な情愛にもとづいたものであつた。夫婦、親子、兄弟、——そこでは義務の意識よりも愛情が先立つ。個人は喜んでおのれを没却しつつそこに生活の満足を感じ得る。共同が「個人」を待って初めてその意義を発揮し得るとすれば、個人が喜んでおのれを没却するこの小さい世界においては共同そのものが発達し得なかつたのは当然であらう。そこで人々はおのれが権利を主張し始めなかつたとともに、また公共生活における義務の自覚にも達しなかつた。そうしてこの小さい世界にふさわしい「思いやり」、「控え目」、「いたわり」、というごとき繊細な心情を発達させた。それらはただ小さい世界においてのみ通用し、相互に愛情なき外の世界に対しては力の乏しいものであつたがゆえに、その半面には、家を一步出づるとともに仇敵に取り囲まれては力と覚悟するような非社会的な心情を伴つた。だから「家」のまわりの垣根がちょうど城壁と鍵に当たるのである。かく見れば「家」の内

部における「距てなき」への要求が強ければ強いほど共同への嫌悪もまた強いというゆえんが明らかになるであろう。

日本の社会の欧米化は確かに顕著な現象に相違ないが、しかしそれがいかに顕著であっても、この「家」が頑強に都会の地に食いついて平べったく存している間は、すなわち世にも珍しい不釣り合いが存立している間は、それは根本的にはまだ過去の地盤を離れないのである。人は「洋服」を身につけ、「アスファルトの道路」の上を「靴」でもって歩み、「自動車」「電車」に乗り、「洋風建築」の何階かの事務所です事を。そこには「洋風家具」があり、「電灯」があり、「蒸気暖房」がある。どこに日本が残っているか、と彼は反問するであろう。が、彼はそこで「万年筆」をもって書き「洋式帳簿」に何事かを記入したあとでやはり「家」へ帰るのではないか。なに、その家がまた西洋建てなのだ、と彼は言うかも知れない。なるほどそれは外形だけは西洋風にできている。しかしそこには門があり、垣根があり、玄関があり、しかも滑稽なことにはその玄関で「脱が」なくてはならないではないか。そこには日本の「家」としての資格は何一つ失われておられない。問題はこの家の大小ではなくしてその有り方にかかわる。人がもしヨーロッパの都会においてかかる資格を持った一つの家に住もうとするならば、彼はとにかく富豪でなくてはならない。その同じ資格を持った家に、ヨーロッパの都会でならば長屋のうちのあまり上等でない一軒に住むだろうほどの収入を持った人が、さほどの困難もなく住み得るのは何ゆえであろうか。それはこの西洋建てと言われる日本の「家」が、根本においていささかもヨーロッパ風に化していないからである。

もう少し進んでこの「洋服」を着た「洋館」に住む人を追究してみよう。彼はその洋館の前庭に芝生を敷き花壇を作っている。時には植木屋を入れてその手入れをする。それは彼とその家族とがそこにおいて楽しむためである。しかし彼は町の公園に対しては何の関心をも示さぬ。公園は「家」の外にある、だから他人のものである。それはあらゆる人から「他人のもの」として取り扱われ「我々のもの」としての愛護を受けることがない。市の経営であるということはその経営を託された吏員以外の何人もがそれにおいて義務を感じないということである。そこで市の公共の仕事が、市民一般の関心をうけることなく少数の不正直な政治家の手に放任される。そこでさまざま不正が行なわれる。しかし洋館に住む人はそれが「家」の外のことであるがゆえにそのが事としては感じない。彼は洋館に住むほどの新しい人として子供の教育には熱心であり、子供がもし不正なことを平気でやるようなことがあれば、その全心情を傾けて関心するのであるが、公共のことについての政治家の不正に対しては、その百分の一ほどの熱心も示さぬ。さらにまたこの種の政治家によって統制される社会が、その経済的病弊のために刻々として危機に近づいて行くのを見ても、それは「家の外」のことであり、また何人かが恐らく責めを負うであろうこととして、それに対する明白な態度決定をささめ示さぬ。すなわち社会のことは自分のことではないのである。というの、この人の生活がいささかもヨーロッパ化していないということである。

洋服とともに始まった日本の議会政治が依然としてはなほ滑稽なものであるのも、人々が公共の問題をおのが問題として関心しないがためである。城壁の内部における共同の生活の訓練から出た政治の様式を、この地盤たる訓練なくしてまねようとするからである。「家」を守る日本人にとっては領主が誰に代わろうとも、ただ彼の家を脅やかさない限り痛痒を感じない問題であった。よしまた脅やかされても、その脅威は忍従によって防ぎ得るものであった。すなわちいかに奴隷的な労働を強いられても、それは彼から「家」の内部におけるへだてなき生活をささめ奪い去るときまではなかった。それに対して城壁の内部における生活は、脅威への忍従が人から一切を奪い去ることを意味するがゆえに、ただ共同によって争闘的に防くほか道のないものであった。だから前者においては公共的なるものへの無関心を伴った忍従が発達し、後者においては公共的なるものへの強い関心関与とともに自己の主張の尊重が発達した。デモクラシーは後者において真に可能となるのである。議員の選挙がそこで初めて意義を持ち得るのみならず、総じて民衆の「輿論」なるものがそこに初めて存立する。共産党の示威運動の日に一つの窓から赤旗が立つるされ、国粋党の示威運動の日に隣の窓から帝國旗が立つるさるといふような明白な態度決定の表示、あるいは示威運動に際して常に喜んで一兵卒として参与することを公共人としての義務とするとき覚悟、それらはデモクラシーに欠くべからざるものである。しかるに日本では、民衆の間にかかる関心が存しない。そうして政治はただ支配欲に動く人の専門の職業に化した。ことに著しいことは、無産大衆の運動と呼ばれているものが、ただ「指導者」たちの群れの運動で

あつて指導せられるものをほとんどあるいはまれにしか含んでいないという珍しい現象である。もとよりそれはこの運動が空虚であることを示すのではない、しかし日本の民衆があたかもその公園を荒らす時の態度に示しているように、公共的なものを「よそのもの」として感じて居ること、従つて経済制度の变革というごとき公共的な問題に衷心よりの関心を持たないこと、関心はただその「家」の内部の生活をより豊富にし得ることのみにかかつて居るのであることは、ここに明らかに示されていると思う。だから議会政治が真に民衆の輿論を反映して居ないと同じように、無産大衆の運動も厳密には無産運動指導者衆の運動であつて無産大衆の輿論を現わしたものであるのではない。それが顕著にロシアの性格を示すのは、ロシアが昔も今も専制国であつてかつて政治への民衆の関与を実現したことがないという事実と、日本の民衆の公共への無関心、非共同的な生活態度との間に、きわめて近い類似が存するからである。だからここにも日本特有の珍しい現象としての指導者のみの運動が「家」と外との区別にもどづいて起こつたといふことはできるであらう。

我々はなお「家」にもどづいた多くの「珍しい」現象を数え上げることができよう。が、それらは皆結局あの最も平凡な街上の姿に、すなわち猪のような電車の前にうづくまつている珍奇な小さい家の姿に、帰着する。これは諸君が日常目撃して、それを明らかに意識すると否とを問はず、情けない姿として、胸に感じていられるちやうどそのものであらうと思ふ。

(昭和四年)

注1 截然……せつぜん(「さいぜん」とも読む)、区別がはっきりしているさま

注2 襖障子……ふすましようじ、部屋の仕切りに用いる障子の一種

注3 痛痒……つうよう、精神的・肉体的な苦痛のこと